

終わらない開発

—— ポスト遊動狩猟採集民ムラブリの開発をめぐる現状分析 ——

二文字屋 脩*

Unending Development: An Analysis of the Current Status of Development Targeting Post-Nomadic Hunter-Gatherers the Mlabri

NIMONJIYA Shu*

Abstract

The aim of this paper is to examine the current situation of development (*phattana*) targeting the Mlabri, who are the only known (post-)nomadic hunter-gatherers in Northern Thailand, in order to explore why the development efforts have not met with much success. Unlike the other well-known hill tribes (*chao khao*), the Mlabri finally caught the eye of the Thai government in the mid-1980s when the hill tribe problems (*panha chao khao*) were settled. Because of this historical fact, we need a new viewpoint totally different from what the previous studies have discussed. In my own fieldwork among the Mlabri, I have found that their development has a remarkable feature, “unending development.” It is interesting to note that development is hampered not only by Thai officials but also by a neighboring ethnic group, the Hmong, and even the Mlabri themselves. This paper tries to explore the historical background peculiar to the Mlabri and to examine why their development does not have an end, by focusing on the different actors and their concerns.

Keywords: Mlabri, Hmong, Thai officials, hill tribes, development, Northern Thailand
キーワード：ムラブリ、モン、タイ人役人、山地民、開発、タイ北部

* 京都文教大学総合社会学部: Faculty of Social Relations, Kyoto Bunkyo University, 80 Senzoku, Makishima-cho, Uji-shi, Kyoto 611-0041, Japan
e-mail: mlamoja1985@gmail.com
DOI: 10.20495/tak.54.2_205

I は じ め に

本稿は、タイ北部で唯一の遊動狩猟採集民として知られるムラブリを対象とする開発を「終わらない開発」と捉え、その要因を、タイ山地民として歩んできたムラブリの歴史的特殊性に加え、開発を推進するタイ人役人、近隣に暮らすモン、そして開発の対象であるムラブリそれぞれに異なる政治的・経済的・社会的な関心から探るものである。

誤解を恐れずに言えば、タイ山地民研究において、開発はもはや扱うには古めかしいテーマとなっている。それはタイ国内における「山地民」というカテゴリー自体の形骸化というだけではない。むしろタイ山地民が今日置かれた状況が、市民権や土地権といった一部の懸案事項を除いては、ある程度落ち着き安定したものであるという認識が、暗黙の了解として研究者の間で共有されているからである。

しかし同じ山地民に数えられながらも、シナ＝チベット語族に属するカレンやモン、ミエン、ラフ、リス、アカとは異なるオーストロアジア語族に属する民族集団、こと本稿で取り上げるムラブリに関しては、そうした共通認識はほとんど意味をなさない。その理由を端的に述べれば、「山地民」として歩んできたムラブリの歴史が他の山地民とは大きく異なるからである。後述するように、山地民開発は当初、ケシ栽培や環境破壊、共産党ゲリラ化などの、いわゆる山地民問題の解決のために導入された政治的手段であったが、ムラブリはこれらの問題のいずれにも関与してこなかった。ゆえにタイ政府がムラブリに介入し始めたのは、山地民開発が始まってから実に四半世紀後のことであり、この時間的深度の浅さがムラブリ開発を遅らせた基本的な要因であると言える。

しかしこの歴史的特殊性を差し引いてもなお、ムラブリを取り巻く今日の生活環境は他の山地民に比べてひどく劣悪である。タイ人役人らはその原因をムラブリの「未開性」に求めようとするが、筆者がフィールドで目の当たりにしてきたのはむしろ、それがタイ人役人の温情主義的な言動に隠された政治的思惑とムラブリを労働力として利用する蒙の経済的利害関係の所産であるということであった。しかしそれ以上に興味深いのは、開発政策の対象であるはずのムラブリ自身が開発の遅れを助長しているということである。ムラブリは長らく狩猟採集をベースとした遊動生活を送ってきたが、彼らの遊動狩猟採集民としての社会文化的態度は、開発現場で求められる個人／集団レベルでの積極的参与とは相容れず、結果的に開発がもたらす潜在的な利益を自ら取り逃してしまっている。結果、フィールドで生起していたのは「終わらない開発」とも表現しうる事態であり、これがムラブリを取り巻く今日の状況を大きく規定している。

以上のことを具体的に明らかにしていくため、本稿ではまず次章にて山地民開発とその現状

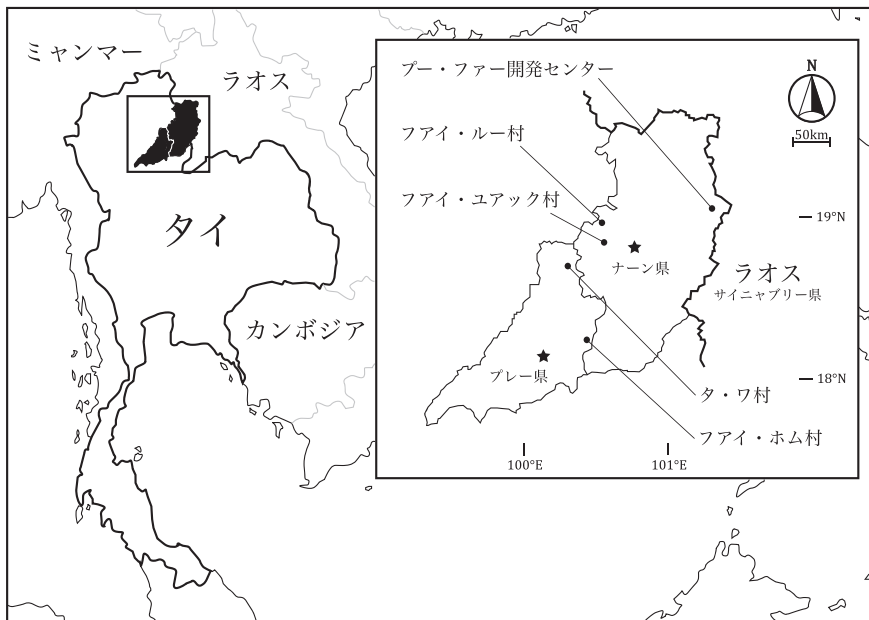


図1 タイ北部・ナーン県とプレー県に所在するムラブリの定住村

出所：筆者作成

を概観する。そして III 章にてムラブリの開発が遅れることとなった歴史的背景を明らかにし、続く IV 章では「終らない開発」の素因を探るべく、開発を推進するタイ人役人、近隣に住むモン、そして開発の対象であるムラブリについて、民族誌的事例をもとに考察検討を進める。なお、本稿で提示するデータは、2012 年 4 月から 2014 年 3 月までの 2 年間、主にナーン県ウィアンサー郡メーカニン区に所在するファイ・ユアック村で行った調査に基づいている（図 1）。

II 山地民開発

II-1 「山地民」と「山地民問題」

山岳地帯が広がるタイ北部は、タイ国のマジョリティであるタイ系諸族とは民族的・言語的・文化的に異なる民族集団が長らく生活圏としてきた地域である。その中でもカレン、モン、ミエン、ラフ、リス、アカ、カム、ティン、ルア、そしてムラブリの 10 の民族集団が、これまで「山地民 (*chao khao*)」と呼ばれてきた [Thailand, Kong Songkhro Chao Khao 2002]。この語が包含する民族集団の定義と範囲は必ずしも通時的に一貫したものではないが [cf. 石井 2000], 1959 年に内務省公共福祉局内に発足した山地民福祉課が公式にこの語を採用して以降、否定的なイメージを伴いながらタイ社会に浸透していった。その背景には 1950 年代後半に構

成された、いわゆる「山地民問題 (*panha chao khao*)」がある。

国家安全保障会議議長を務めたことのあるカチャットパイによれば、当時のタイ政府が問題視していたのは、1) ケシ栽培によるアヘンの流通、2) 焼畑移動耕作による森林資源・水資源の破壊、3) 頻繁な越境移動と不法な活動がもたらす国境の治安問題、4) 経済社会問題、5) 無知と居住国への関心の欠如や共産主義への共鳴が引き起こす少数民族問題であった [Khachatphai 1996: 126-130]。とくにこれらの問題群で最も深刻なものとされたのが、ケシ栽培、環境破壊、そして共産党ゲリラ化である [Wanat 1989: 13]。

しかしここで指摘しておくべきことは、これらの問題は何も 20 世紀中頃に突然降って湧いたものではないということである。例えばケシ栽培とアヘン売買は 1958 年に全面的に禁止されたものの、19 世紀末にアヘン専売制を創設した当時のシャム政府にとって、アヘン流通の徴税請負からの収益は唯一にして最大の収入源であり [パースック・ペーカー 2006: 150]、1930 年代にはビルマから密輸された安価なアヘンに対抗するため、政府はケシ栽培を奨励さえしていた [McCoy 1972: 66-67; Renard 1997: 322]。また環境破壊の元凶とされた焼畑は灌漑システムが普及する以前から平地タイ人によって行われていた農法の一つであり、第二次世界大戦以前は取り立てて問題視されるものではなかった [Judd 1977: 8; Chapman 1978: 222]。むしろ平地タイ人が行っていた焼畑は植生の回復に十分な休閑期間をとることがなかったため、生態学的に最も有害なものであったという指摘すらある [Tapp 1989: 64]。そして第二次世界大戦後に始まった現象という点で他の問題群とは多少性格が異なるが、山地民が共産主義に共鳴しゲリラ化した背景には、経済的困窮や民族差別、政府に対する潜在的不満があり、ビルマやラオスといった隣国での共産主義と民族主義の波を受けながら、山地民は共産主義に傾倒していったという [ibid.: 77]。

こうした歴史的事実に加え、全ての山地民が等しく山地民問題に関わっていたわけではないということは、とりわけ強調すべき重要な事実である。例えば焼畑には休閑方式の違いによっていくつかの種類があるが [cf. Kunstadter and Chapman 1978]、ケシ栽培に従事していたのは、長期耕作／放棄型をとっていたモンやミエン、リス、ラフ、アカであり、短期耕作／長期休閑型をとっていたカレンやラワは自給用の陸稲や野菜を栽培していた。また、共産主義に傾倒したのは主にモンやミエンの一部に過ぎなかったことから、「山地民問題」が想定する「山地民」は実は統一した内実を欠いていたと言える [J. McKinnon 1989: 303]。

しかし国境にほど近い山岳地帯という生活空間や、焼畑という生業様式の類似性に基づき、多様な民族集団は一樣に「山地民」とラベリングされてしまい、山地民に起因するとされた諸問題が「山地民問題」として構成されてしまった。¹⁾ ここにタイ政府の政治的作為性を読み取

1) 山地民問題がナショナリスト・イデオロギーの極めて強いサリット政権下で具体化したことは偶然

ることは決して難しいことではないが、確認すべきであるのは、山地民問題とは主として「山地民が直面している問題」ではなく、「山地民によって引き起こされる問題」であったということである [Khachatphai 1983: 70]。片岡がいみじくも指摘しているように、山地民は「国家 (*chat*)」に危害を加える有害な存在であると見なされていた [片岡 2013: 241]。

II-2 山地民開発

山地民問題の政治的作為性はさておき、先の問題を解決すべく、タイ政府は1959年から山地民政策を本格的に開始したが、山地民社会への政治的介入を正当化するものとして用いられたのが「開発 (*phattana*)」であった。とくに山地民開発を語る上で重要なのは、開発とセットで引き合いに出される「福祉 (*songkhro*)」である。事実、山地民開発を担ってきたのは公共福祉局内の山地民福祉課であり、同課の設立40周年を記念して出された報告書には、山地での生活環境の困難さ、公衆衛生の劣悪さ、教育の欠如、タイ語会話能力の欠如といった「福祉の問題」が山地民開発の動機であったと明記されている [Thailand, Kong Songkhro Chao Khao 2002: 13]。「福祉の問題」という見解が単なるまやかしに過ぎないことはすでに見てきたとおりであるが、少なくとも以上の問題を解決するための政治的介入こそが政府からみた山地民開発であり、それは山地を領土内に組み込むことであると同時に山地民人口の管理を目的とした極めて政治色の強いものであった [K. McKinnon 2011: 61]。

当初の山地民開発は、民族集団ごとの文化的多様性や地域ごとの社会経済的状況を踏まえながら、主に再定住と常畑耕作を骨子とした表面的なタイ化を目指す同化政策であった。しかし1976年には独自の宗教と慣習を保持する権利を認めた上で、山地民を国家に対して忠誠心をもち、王室を敬愛し、国籍を有する「第一級のタイ市民」[Wanat 1989: 18]とする統合政策への転換が図られることとなる。統合政策の具体的目標とはとくに、1) 山地民の収入を増大し生活水準を引き上げること、2) 山地民にタイ国の市民であることを自覚させ、タイ国への忠誠心をもたせること、3) 山地民に自分自身やコミュニティの改善を自ら行わせること、4) 山地民にケシ栽培をやめさせること、5) 山地民の恒久的な農業や他の適正な職業を支援すること、6) 山地民に定住させて居住地に愛着心をもたせ、国境問題に対して国家の耳となり目となるべく指導することであり [Khachatphai 1996: 143]、質的成果が求められていったと言える。

ではない。サリットは「民族・宗教・国王」が三位一体となった「ラック・タイ」(*lak thai*)という国是を基礎に据えた「タイ式民主主義」と呼ばれる国王を元首とする統治体制を打ち出し、米国の反共開発戦略を受けて「国の開発」(*phatthana chat*)を掲げる開発体制を打ち出した[末廣1993]。「国王と仏教を愛するのがタイ国民、これを破壊するのがコミュニストである」という彼の言葉からも顕著に読み取れる通り、これら二つの支配的言説を通じて、山地民は「タイ化されるべき人びと」として、また「開発されるべき人びと」として位置づけられていったのである。

とくにこうした転換の背景には、山地民問題に対する認識の変化がある。例えば開発専門家に焦点を当てながら山地民開発について論じるマッキノンが指摘しているように、初期の山地民開発は極めて政治色が強いものであったが、研究者や開発専門家はその政治性に無頓着であった。しかしその後の調査研究を通じて、山地民問題が山地民に対する先入観や不正確な評価に基づいて構成されたこと、さらに山地民問題の政治性が強く認識されていくようになると、従来のトップダウン型の開発が見直されるとともに、参加型開発による質的成果への関心と要求が高まっていったのである [K. McKinnon 2011]。

しかし政府による山地民への政治的介入は、2000 年代に入って著しく減退する [片岡 2013: 246]。その直接的な契機とも言えるのが、2002 年の省庁再編である。これにより山地民開発を担ってきた公共福祉局は、内務省から新設された社会開発・人間の安全保障省に移管され、同局傘下の県山地民開発福祉センターは県社会開発センターに改組された。山地民問題が 1980 年代中頃から一定の収束をみせていくなかで起きたこれら一連の動きは、「山地民問題は終結した」とする政府の立場表明であり、以後、『『山地民問題』は単なる弱者の問題へと還元されていった」 [Kwanchewan 2006: 381]。²⁾

II-3 タイ山地民の現状

山地民開発は極めて特殊な政治的状況下で進められてきたが、開発が山地民社会にもたらした影響は計り知れない。当然のことながら、政府は山地民開発を肯定的に評価し、山地民が抱える「福祉の問題」や山地民が国家にもたらす「山地民問題」に対して積極的に取り組んできたことを強調する。例えば先の山地民福祉課の報告書には、山地民開発が山地民問題の解決に大きな役割を果たしたことに加え、それが山地民自身の「生活の質的向上 (*phatthana khun-naphap chiwit*)」に直結するものであったことが声高らかに謳われている。具体的には、収入の増大や米の自給率向上による自活的生活を達成した村の増加といった社会経済開発、そして常畑耕作の推進による農地縮小が環境保護に繋がったことなどである [Thailand, Kong Songkhro Chao Khao 2002: 35-39]。なお、カチャットパイは山地民開発が山地民社会にもたらした良い結果として、1) 経済状況の改善、2) 生活の質的向上、3) 公衆衛生の向上、4) 生活環境の快適さの向上、5) タイ文化の受容によるタイ化を挙げている [Khachatphai 1996: 164-167]。

一方で、研究者や NGO などは、山地民開発が山地民社会にもたらした新たな問題を指摘する。例えばミエン出身のタウインは、換金作物栽培の導入によって肥料や農薬などに掛かるコ

2) 山地民問題の一応の解決に伴い、政府は現在、「山地民」の代わりに「民族集団」(*klum chatthipan*) を使用しているが、これは省庁再編以後に山地民政策を引き継いだのが社会開発・人間の安全保障省に所在する民族集団活動事務所であることに由来する。但し、この語は山地民と指定された少数民族に限らず、タイ国内の少数民族全体を含むことに注意されたい。

ストを負担できず借金を抱えるようになったことや、化学肥料の使用によって健康被害と環境汚染が引き起こされていること、そして国家的規模で推奨されたエスニック・ツーリズムでは観光客の捨てるゴミが環境汚染を招く恐れがあると同時に、伝統文化を売り物にすることでエスニック・アイデンティティが崩壊する恐れがあると指摘している [Tawin 1997]。³⁾ また山地民開発を「いかがわしい」と表現するチュピニットは、化学肥料の使用による健康被害と環境汚染に加え、今日の山地民が抱える社会問題として、売春、エイズ、そして麻薬中毒を挙げている [Chupinit 1994]。都市への羨望を抱く少女たちが現金収入のために売春に手を染め、エイズキャリアとなった事実を伏せて村に戻るために山地でエイズが蔓延する。さらに社会文化変容による精神的葛藤や貧困問題からの逃避欲求が、アヘン吸引に結びついて中毒者が増加しているという。

こうした山地民開発に対する評価の違いが、それが山地民問題の解決を目的としたものであるのか、あるいは山地民が抱える諸問題の解決を目的としたものであるのかという、立場と認識の違いにあることは言うまでもない。⁴⁾ その意味で山地民開発の是非自体を問うことはそれほど生産的ではないとも言える。確かに1999年4月にチェンマイ県庁前で行われた山地民による大規模なデモは、土地権や森林使用権の要求に加えて国籍を要求するものであり [Bangkok Post 1999. 5. 16]、山地民問題が一定の解決を見たとは言え、山地民が抱える問題や山地民がタイ社会で置かれている政治的状况にはまだまだ課題がある。しかし山地民開発の本来の意図がどうであれ、これまでの山地民開発が少なくとも山地民の生活水準等の底上げやタイ社会における市民権の獲得に寄与したこともまた一つの事実として認めるべきであろう。

しかし残念なことに、これまでの山地民開発や山地民をめぐる近年の動向からは、本稿が対象とするムラブリの現状を把握することは難しい。同じ「山地民」でありながらも、唯一の(ポスト)遊動狩猟採集民として知られてきたムラブリに対しては、上述した山地民開発とは全く異なる前提が必要となるからである。後述するように、ムラブリには「もうひとつの山地民史」ともいえる特殊な歴史があり、このことがムラブリを取り巻く今日の状況、延いてはムラブリ開発にも大きな影を落としている。

3) タイ北部のエスニック・ツーリズムについて議論するブラシットは、その負の側面として、利権をめぐるコミュニティ内での葛藤や、観光客を対象としたアヘンや売春、さらには観光客の私物を狙った窃盗などの犯罪を指摘している [Prasit 1997: 284-286]。

4) 山地民開発の肯定派は山地民開発による生活の質的向上を謳い、否定派はその副産物を強調する。しかしいずれも山地民問題それ自体の問題性を問うてはいないという点で、結局のところ両者は同じ問題意識を共有していると言える。カチャットバイは社会変化の中でもたらされた負の影響ないし問題として、1) ヘロインの蔓延、2) 売春問題、3) ストリートチルドレンや社会不安などの社会問題、4) 環境汚染問題を挙げているが [Khachatphai 1996: 167-173]、これらの問題が山地民開発の問題ではなく、あくまで山地民開発に伴う社会変化にその原因が求められていることに留意されたい。

III 遅れた開発

III-1 もうひとつの山地民史

タイでは「黄色い葉の精霊／お化け (*phi tong lueang*=spirits of the yellow leaves)」として知られ、オーストロアジア語族・クム語派に属するムラブリ語を母語とするムラブリだが、山地民開発史という視点から押さえておくべきことは、タイ政府がムラブリに介入し始めたのは山地民問題が構成されて実に四半世紀後の 1980 年代中頃であったということである。その理由を端的に言えば、ムラブリという存在が政府にとって何ら脅威ではなかったという点に尽きる。すでに見たように、山地民開発と山地民問題は不可分の関係にあった。しかし全人口が僅か数百人と極めて少なく、狩猟採集をベースとした遊動生活を送ってきたムラブリは、山地民問題の主要な問題群を全く共有してこなかったために、政府はその存在を把握しつつも、無視し続けてきたのである。事実、公共福祉局が 1960 年代中頃に出した調査報告書には、次のように書かれている。「ある小規模な山地民は狩猟採集に従事し、森で生活し、森を放浪している。この部族は『ピー・トン・ルアン』あるいは『ユンブリ』と呼ばれている。あるレポートには、彼らにはアクセスの困難なナーン県の森の奥深くで時折遭遇することができると書かれている。しかしこの調査報告書の目的を考えれば、この民族集団とは関連性がなく、再度言及する必要もない」[Thailand, Krom Prachasongkhro 1966: 10]。

この調査報告書は山地民の農業状況把握のための調査報告と銘打ってはいるものの、山地民問題の元凶が焼畑移動耕作にあると明言されていることから [ibid.: 16], 当時の政府の関心はいくまで焼畑移動耕作を生業とする民族集団に限定されていたことが窺える。つまり狩猟採集を生業とするムラブリは、政府にとって敢えて開発政策の対象とする必要のない存在だったわけである。

このことは、政府によるムラブリへの介入が、山地民問題が一定の収束をみた 1980 年代中頃に始まったという歴史的事実からも明らかだろう。政府は 1984 年に内戦終結宣言をしたが、その直接的な契機となったのが 1982 年のタイ共産党の解党であった。これによりゲリラ活動は一気に沈静化し、激戦地を含むタイ北部には一定の平和的秩序がもたらされることとなったが、政府がムラブリに目を向け始めたのはまさに、タイ北部地域の政情不安が解消され、内政への取り組みが可能になった時期であった。⁵⁾

5) 内戦終結宣言により共産党ゲリラの一大活動拠点であったナーン県に平和と安定が取り戻されたことから、タイ国内のメディアはこぞってムラブリ取材し始めた。特にムラブリを題材とした 1985 年に公開された映画『微笑む太陽』(*Tawan Im Chaeng*) はタイ国内でヒットを記録し、それまでその存在すらも怪しまれていた「黄色い葉の精霊」の存在は、瞬く間にタイ国内で認知されていった。

III-2 ムラブリ開発史

山地民問題の解決に向けて大きな前進を見せた 1980 年代中頃、政府はムラブリに対してようやくその重い腰をあげることとなったが、政府よりも早くからムラブリに関心を寄せたのは、米国の福音派プロテスタント宣教団体 New Tribes Mission が派遣したアメリカ人宣教師のユージーン・ロバート・ロング（タイ語名：ブンジューン・スックサネー）とその家族であった。彼らはムラブリを対象とした開発プロジェクトを開始すべく 1981 年にナーン県を訪れたが、内戦で許可が下りなかったため、隣県であるプレー県にて活動を開始した [Bunyuen 1997: 94; cf. *Bangkok Post* 1990. 4. 19]。地道な活動の結果、周辺の森に住んでいたムラブリは徐々に定住し始め、近隣に暮らすモンの村名と同様にファイ・ホーム村、あるいは宣教師のタイ語名にちなんで「ブンジューン村」とも呼ばれる定住村が設置され、今日に至っている。

他方、政府によるムラブリへの介入は 1985 年に始まる。ナーン県の森に散在して暮らすムラブリ（凡そ 150 人）を対象とした社会調査の結果を踏まえて、山地民委員会、ナーン県山地民開発福祉センター、山地民研究所、そしてシラパコーン大学⁶⁾により、「ムラブリ・前農耕社会のための開発プロジェクト」が開始された。1992 年までの 8 年間におよぶ同プロジェクトでは、医療提供、教育、職業訓練を通じた、農業の導入と定住村の設置が目的とされたが、定住生活に伴う集住化や部外者との密接な関わりによるストレスなどから、ムラブリは森へと逃げ戻ってしまったため、プロジェクトは中止に追いやられてしまった [Suchat 2003: 49]。

1994 年には、ナーン県バーン・ルアン郡の郡長を中心に、バーン・ルアン郡北ピー村での「黄色い葉族開発保護センター」の設置が計画されたが、予算と人員不足のためこの計画も頓挫した。しかし偶然にもその翌年からナーン県観光振興期間（1995 年から 2002 年までの 8 年間）が始まり、重点プロジェクトの一つに「黄色い葉族開発保護センター」が選出されことで、プロジェクトは再開されることとなった。先のアメリカ人宣教師に協力を仰いだこともあり、プロジェクトは順調に進み始めたように思えたが、しかし時を同じくして、地元観光業者たちによるエスニック・ツーリズムが北ピー村から 1 km ほど離れた南ピー村で開始されたことで、当該地域は行政と民間による政治的対立の様相を呈していった。アメリカ人宣教師は伝統的な生活を無理矢理再現させてムラブリを単なる見せ物にしていると観光業者らを批判し、一方の観光業者らは開発の名のもとに進められる文化保護活動がムラブリの伝統的な生活を破壊しているとアメリカ人宣教師を批判したからである。さらにムラブリが捨てるゴミが周囲の環境を汚染しているとして、南北のピー村の村民たちがムラブリとセンターの立ち退きを要求したことから、この問題は地元住民を巻き込む大規模な行政への反対運動へと発展していった

6) シラパコーン大学が参加しているのは、同大学で教鞭を執っていた民族考古学者であるスリン・プーガジョン教授を中心とする調査団が 1980 年代前半にムラブリの集約的調査 [cf. Surin and Staff 1992] を行ったためである。

[*Bangkok Post* 1998. 9. 28]。そこで関係当局は「黄色い葉族問題解決作業部会」を組織し、問題解決に向けて動き出す一方で、センターの移転を含めた代替案を模索した。しかし有力な代替案は見つからないまま、住民の反対にあったセンターはピー村から撤退することになり、プロジェクトは中止に追いやられてしまった。

ほどなくして関係当局は、開発を重点的に推進する拠点として、ナーン県ウィアンサー郡メーカニン区に所在するファイ・ユアック村を選定した。モンに労働力を提供しながらファイ・ユアック村周辺の森に暮らす凡そ 90 名のムラブリが確認されたからである。そして 1999 年 1 月、関係当局はファイ・ユアック村に暮らすモンと話し合いをもち、ムラブリの希望を聞いた上で、北に直線 500 m 離れた空き地にムラブリの居住地を設置した。

近年の動きで最も顕著であるのは、2007 年 3 月 2 日のシリントーン王女によるファイ・ユアック村の訪問と、それに端を発する王室プロジェクトの開始である。この王室プロジェクトは、1) 伝統文化の維持、2) 人間としての尊厳の確保、3) 他民族集団との共住と調和、4) 足るを知る (*pho phiang*) 生活の 4 つの柱に基づいている。プロジェクトの中心的役割を担っているのは森林局であるが、現在までに 3 つの定住村が新たに設置されるに至っている。一つはタイ・ユアンの村として 1979 年に登録されたプレー県ソン郡のタ・ワ村である。ムラブリは少なくとも 1998 年からその周辺の森に暮らし、村人に労働力を提供してきたが [*Thai Rat* 2001. 8. 27]、王室プロジェクトにより定住化が進み、現在では 13 世帯、合わせて 42 人のムラブリが暮らしている。二つ目の居住地はナーン県ボー・クルア郡に所在するプー・ファー開発センターである。⁷⁾ ラオスとの国境にほど近いこのセンターは、軍主導で 1999 年に作られ、後にシリントーン王女による民族集団の文化遺産保護を目的とするセンターに指定された。センター内にあるムラブリの定住村は 2008 年に設置され、ナーン県とプレー県から集められた 16 世帯、合わせて 64 人が暮らしている。そして最も新しい定住村が、ナーン県ムアン郡に所在するファイ・ルー村である。この村の最も特徴的な点は国立公園区域内にあることであり、他の定住村に比べて際立っているのは、ここで暮らす 18 人のほとんどが 20 代の若者ということである。なお、ファイ・ルー村への移住は、他の定住村では土地を持たない若者たちを中心に現在も続いている [cf. Sakkarin 2013] (表 1)。

III-3 ファイ・ユアック村における開発の今日的状況

これまでムラブリ開発の中心を担ってきたのはナーン県山地民開発福祉センター（現在は

7) プー・ファー開発センターで進められているプロジェクトの目的は、1) ムラブリの文化伝統を保護すること、2) ムラブリに民族集団としての自覚と誇りを持たせること、3) ムラブリに関する学術的資料を提供すること、4) ムラブリ文化の学習と観光を促進すること、5) ムラブリ文化の調査拠点とすることの 5 つである。

表1 定住村別の人口と比率（2013年8月30日現在）

村 名	人口（人）	比率（%）
ファイ・ユアック村（Ban Huai Yuak）	197	47
ファイ・ホム村（Ban Huai Hom）	102	24
タ・ワ村（Ban Tha Wa）	42	10
ファイ・ルー村（Ban Huai Lu）	18	4
プー・ファー開発センター（Phu Fa Development Center）	64	15
合 計	423	100

出所：筆者作成

ナン県社会開発センターと改名）であったが、現在、ファイ・ユアック村でムラブリ開発に携わっているのは、社会開発センター（Social Development Center: SDC）に加え、メーカニン区行政自治組織（Tambon Administrative Organization: TAO）、ノンフォーマル教育局（Department of Non-Formal Education: DNFE）、そして国境警備隊（Border Patrol Police: BPP）の4つの公的機関である。このうち TAO は幼稚園を、DNFE は事務所兼教室を、BPP は駐在所を、それぞれ村内に設置している（図2）。しかし村内にある幼稚園で働く TAO の職員二人を除いて、村内に職員や隊員を常駐させている機関はない。DNFE と SDC の職員、そして BPP の隊員は、それぞれ用事があるときにのみ村を訪れる。

ファイ・ユアック村には現在、36 世帯、合わせて 197 人のムラブリが暮らしている。南に

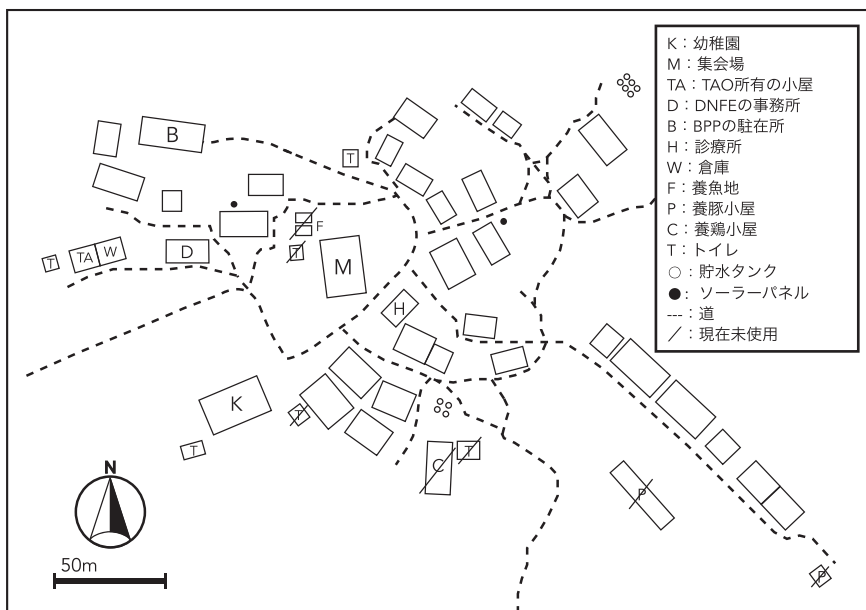


図2 ファイ・ユアック村の村落図（2014年3月現在）

出所：筆者作成

歩いて 900 m ほど離れたところには同名のモンの村（2015 年 3 月現在で 101 世帯，649 人）があるが，ここは 1975 年に作られ，1991 年に正式に登録された村である。同名であるのはムラブリの居住地がモンの村内に併設する形で設置されたことによるが，普段の生活でモンとムラブりが共住しているという印象はない。むしろ二つの居住地の間にある小さな森が両者を隔てる「壁」の役割を果たしており，それぞれがまるで独立した村落であるように認識されている。ファイ・ユアック村から南にさらに 4 km ほど離れた場所にはナ・ンギウ村（Ban Na Ngiu）というミエンとモンが共住する村がある。ここにはミエンとモン合わせて 1,000 人ほどが暮らしており，ファイ・ユアック村のモンと同様，主にトウモロコシ，ショウガなどの換金作物栽培で生計を立てている。今日のムラブリの生計を支えているのは，これら周辺に暮らすモンとミエンが所有する畑での賃金労働であるが，その他に彼ら自身が所有する畑でトウモロコシの栽培に従事している。また生計手段としては極めて小規模だが，エスニック・ツーリズムも行われている [Nimonjiya 2013; cf. Nimonjiya 2014]。

先の「ムラブリ・前農耕社会のための開発プロジェクト」に顕著であるように，当初の開発政策は社会進化論的観点に基づいていた。つまり当初の開発政策では，狩猟採集から農業へという生業様式の進化図式とともに，遊動生活から定住生活という居住形態の進化図式がセットになっていたのであり，農業をベースとした定住生活の確立こそが目指すべき開発像であるとされてきたわけである。⁸⁾ しかしファイ・ユアック村の設置以降は，他の山地民を対象とした開発政策と同様に，生活の質的向上とその先にある自立的な生活の実現が目指されている。ここでいう「生活の質的向上」とはすなわち，社会インフラの整備のことであり，水道設備の設置や幼稚園の設立，そして学校教育の支援などがこれに当たる。では開発によってムラブリの生活環境は果たして質的な向上を見せたのだろうか。この点を明らかにするためには，隣に暮らすモンを比較対象にする方が手っ取り早いだろう。

それぞれの村を歩いて即座に理解できるのは，同じ「山地民」であるにも拘わらず，両者の間には歴然とした経済的な格差があるということである。例えばモンの居住地では全ての世帯に電気が通っているが，ムラブリの居住地では村内にある行政機関の施設から数世帯が延長コードで電気を使用しているのみである。⁹⁾ またモンではほとんどの世帯が水道を各自の敷地内に引いているが，ムラブリでは三カ所ある水道を共同利用している。またモンでは多くの家がコンクリートや大木を使った立派なものであるのに対して（写真 1），ムラブリは木の支

8) ここに山地民開発でしばしば指摘される統治の論理を読み込むことはやや行き過ぎだろう。そのように考えるのは，当時のムラブリの人口が現在の 400 人にも達していなかったため統治による効果はほとんど期待されていなかったこと，さらにはムラブリ開発において定住化とは，あくまで生業様式の変化による遊動から定住への単線的な社会進化論的観点に基づいていたからである。

9) 2005 年にはソーラーパネルが各世帯に提供され発電が可能となったが [Ikeya and Nakai 2009: 254]，筆者の調査時にはすでにほとんどが壊れていたため，使える状態ではなかった。



写真1 モンの家（2015年3月8日筆者撮影）



写真2 ムラブリの家（2015年3月8日筆者撮影）

柱に竹を縦に裂いて広げ外壁として張り付けただけの極めて質素なものである（写真2）。さらにモンでは101世帯中41世帯がピックアップトラックを持ち、その内の一部は換金作物栽培に不可欠な機材等を持っているが、ムラブリでは海外からの支援で提供された4tトラック1台以外、125ccのバイクを各世帯が少なくとも1台所有しているに過ぎない。

こうしたモンとムラブリの生活環境の違いが、先の「遅れた開発」の産物であることは想像に難くない。1950年代後半から開発の対象となったモンとは異なり、ムラブリがその対象とされたのは1980年代中頃だったわけだが、この四半世紀にも及ぶ時間差は、その生活水準において両者の間に埋め難い大きな溝を生んでしまった。確かに売春やエイズ、そして麻薬中毒といった他の山地民が抱える深刻な問題をムラブリは共有しておらず、山地民問題という国家的関心の枠外に置かれたことが偶然にも良い結果となった側面もある。しかし現在では若い世代のほぼ全員が初等教育を受けることができ、基本的な社会インフラは整っているとはいえ、開発において重視されていたはずの「生活の質的向上」は、行政の報告書に見る雄弁な語り口ほどには達成されていない。約半世紀にも及ぶ山地民開発において、様々な試行錯誤の中で獲得されてきたであろうノウハウを、社会インフラのみならず、生活環境の改善などにも活かすことができるのではないかという期待とは裏腹に、ムラブリを取り巻く状況は劣悪である。このことはすなわちムラブリ開発がうまくいっていないということであるが、これは同時にムラブリを取り巻く今日の状況を単に「遅れた開発」という先の歴史的特殊性にのみ帰することはできないということを示唆している。そうであるならば、問われるべきは必然的に次のような問いになるだろう。開発を遅らせているのは何か。以下ではこの問題について、開発を推進するタイ人役人、近隣に暮らすモン、そして開発の対象であるムラブリそれぞれに焦点を当てて考えていきたい。

IV 終らない開発

IV-1 温情主義的態度に隠されたタイ人役人の政治的思惑

ファイ・ユアック村にムラブリの居住地が設置されてから現在に至るまで、実に様々な開発プログラムが先の公的機関によって進められてきた。しかし結果から言えば、そのほとんどが十分な成果をあげることができていない。その大きな要因の一つは、現状を正確に把握せずに目標だけが設定されたプログラムを一方的に押し付けてきたことにある。例えば狩猟採集や賃金労働に代わる自給的な生活の確立に向けて導入された代替生業は、稲作や家畜飼育、そしてエスニック・ツーリズムであった。長年にわたり他民族に労働力を提供してきたこともあり、ムラブリは既に必要な農業技術を習得してきたが、しかし関係当局は化学肥料を大量に使用する従来の農法を問題視し、2000年には有機栽培を推奨する「黄色い葉新米プロジェクト」を開始した。しかし結局はほとんどの世帯が自家栽培を止めて賃金労働に戻ってしまった。このことについてあるタイ人役人は「ムラブリは面倒なことが嫌いだった」と答え、ムラブリもまた同じように答えるが、「面倒 (*lambak*)」というタイ語の解釈は同一ではない。役人らが口にする「面倒」とはムラブリの性格をあげつらうものだが、ムラブリのそれは自家栽培で得られるメリットが極めて低かったことを意味しているからである。実際、関係当局が行ったのは有機栽培農法の技術と農地の提供だったが、それはあくまで自家消費を目的としたものであり、市場経済とは切り離されていた。有機栽培による現金収入は見込めなかったため、ムラブリはそれを放棄したわけである。また2008年に導入された家畜飼育でも結果はほとんど同じであった。関係当局は水牛(20頭)、豚(20頭)、鶏(150羽)、鴨(14羽)をムラブリに無償提供したが、1年も経たないうちに、それらはムラブリの胃袋に消えるか、売却されてしまった。家畜の再生産による安定的な食料供給について知識が乏しかったことも一因ではあるが、売却されたことが物語っているように、自家消費のみを目的とした家畜飼育では現金収入が見込めず、貨幣経済に基づく定住生活とは相容れなかったことが大きな要因であったと考えられる。加えて、国内外の観光客を対象に地元観光業者の協力のもとで事業整備が進められたエスニック・ツーリズムは、市場規模が極めて小さいこと、そして旅行会社が収益の大半を懐に入れてしまうために、ムラブリには1回のツアーで一人当たり凡そ20~50バーツ(60~150円:1バーツ=3円計算)ほどしか得られないことなどから、成果をほとんど挙げられていないのが現状である[Nimonjiya 2014: 110-111]。

そもそも役人たちにとって「開発(パッタナー)」とは具体的に何を意味するのだろうか。この点に関して、「何がパッタナーされたのか」と彼らに尋ねてみると、「定住した」「水浴びすることを覚えた」「タイ語を話すことができる。とくに若い世代は読み書きもできる」と

いった答えが返ってくる。これらは先の「生活の質的向上」に含まれるものだが、彼らが開発の失敗を認めることはないものの、インフラ整備といったハード面を除いて、目立った成果を挙げられていないのが実情である。このことを踏まえて「開発はなぜ進まないのか」と尋ねてみると、「物を大切に管理しない」「責任を取ろうとしない」「昔のように自由 (*isra*) を好むからから開発が進まない」といった、ムラブリの側に原因があるとする趣旨の答えが返ってくる。¹⁰⁾ この点は後述するためここでは詳しく論じないが、少なくとも開発を推進する役人側の問題として、パッケージ化されたプログラムを一方的に押し付けてきた点をここでは確認しておきたい。その上で目を向けるべきであるのは、ムラブリの要求やファイ・ユアック村の今日的状況を踏まえた実のある開発プログラムが施行されることがほとんどないという事実である。それは何故なのか。ここではある事例を取り上げることで、この問題に答えたい。

【事例 1】

2013 年 12 月 13 日の晩、村のほぼ中央に位置する集会場である会議が開かれた。参加を呼びかけたのは、BPP 隊員 (タイ人男性)、DNFE 職員 (タイ人女性)、そして TAO 職員 (タイ人女性) である。議題は、村の中央に位置する集会場に設置されたテレビの管理についてであった。BPP 隊員の話では、自分たちの「好意」でテレビ 1 台を無償で提供したにも拘らず、ムラブリはそれを大切に管理していないという。具体的には、見終わった後に布などを掛けて粉塵対策をしなければならないが、ムラブリはほったらかしにしているということであった。そこで BPP 隊員はその場にいた者たちに次のように問いかけた。「これからこのような状態が続くならテレビは撤去するが、それでもいいか」。これに対して大人たちは、集会場の端に座りながらじっと黙っていたが、その場にいたある若者は、「タ・シー (ムラブリ男性) の家にもテレビがあるから別に良いんじゃないか。よそ者 (役人)¹¹⁾ が怒るのなら、ここ (集会場) にテレビはもういらないだろう」と周囲にいる大人たちにムラブリ語で話しかけ、大人たちもまた彼に静かに同意した。彼らのひそひそ話に気づいた TAO 職員は、「意見があるなら大きな声で言ってみなさい」と声をかけたので、先の若者は「ここ (集会場) にテレビはもういない」とタイ語で答えた。すると彼の発言が意外であったのか、役人たちは驚きを隠せずに互いを見合わせ、TAO 職員は少し焦った様子で、「それは BPP の好意に対して失礼ですよ。タイ人ならば、彼らの好意に感謝しなければなりませんよ」と若者を諭した。そして視線をすぐ目の前に座る子供たちに移し、「ここでテレビを見たいでしょう? テレビを見たいとい

10) ここで付言しておくべきことは、こうしたムラブリの「未開性」に開発が遅れている原因を求める言説が、「ムラブリは依然として未開である。ゆえに開発が必要だ」という論理を生み出し、新たな開発プログラムを再生産する仕組みを内在化しているという点である。

11) ムラブリは自分たちのことを「ムラ」(*mɿaʔ*: 人間) と呼び、自分たち以外のことを「グウォール」(*kwɔr*: サル) と呼んで両者を明確に区別する。本稿では「グウォール」を全て「よそ者」と訳すが、文脈によってその指示対象が明らかな場合は括弧付きで対象を明記する。

う子は手をあげましょう」と挙手を促した。これに対して子供たちはほぼ全員が手をあげたが、それを見た大人たちは「手をあげるんじゃない。テレビはタ・シーの家にもあるんだから」と、手を下ろすようムラブリ語で促した。そこで子供たちは言われた通り手を下ろしたが、その様子から大人たちの発言内容を察した TAO 職員は、すぐさま「子供たちを強制してはいけません」と大人たちに釘を刺し、大人たちが黙り込んだのを確認してから、挙手をするよう再び子供たちに求めた。しかし子供たちが後ろを振り返り大人たちの顔色を窺おうとするので、「自分たちで考えて手をあげなさい」と強めに言った。そして子供を含めた多数決の結果、管理者を決めてテレビをしっかりと管理するという約束のもと、テレビは引き続き集会場に置かれることとなった。

この会議はたまたま村を訪れていた BPP 隊員と DNFE 職員の呼びかけで開かれたものであるが、この事例で注目すべきは、この会議が「ムラブリにテレビを継続して使用させる」という結論ありきで進められていたということである。BPP 隊員に対して異を唱えた若者や、挙手をする子供たちを諭した大人たちに対する TAO 職員の「忠告」が暗に示しているように、「場合によってはテレビを撤去する」という選択肢は役人らに初めからなかった。このことは、テレビを提供することがそもそもムラブリにとって益であるのかという本質的な議論が最初から置き去りにされていることから明らかであるが、彼らがこの会議を通じて欲したのは、ムラブリからの積極的な合意だったわけである。もちろん、ムラブリ側からすれば単に「恩着せがましい」わけだが、そもそも行政側が主導する開発は、こうした「好意の強要」ともいえる性格を伴っていることが多い。しかしそうしたネガティブな側面があからさまに表面化することはない。そこには巧みな手だてがあるからである。

例えば「テレビはいらない」という若者の発言を受けて、TAO 職員は突然、「タイ人ならば」と口にした。つまりムラブリを「あなたたちムラブリ」ではなく「わたしたちタイ人」とみなすことで、若者の発言が不当であることを示そうとしたのである。ムラブリは現在、全員がタイ国籍を有しているため「タイ人」であることに誤りはない。しかしムラブリに言及する際、タイ人役人らは普段、「ムラブリ」や「トン・ルアン」（ビーは蔑称であるため避けられる）といった呼称を用い、「タイ人」として言及することはまずない。にも拘わらずムラブリもまた「（自分たちと同じ）タイ人である」と TAO 職員が強調したのは、「タイ人らしさ」というナショナル・アイデンティティへの同調による圧力によって、テレビの撤去という本来の目的にそぐわない事態を回避しようとした彼女なりの策であったと考えるべきであろう。このことは子供たちを味方につけようとしたことから明らかであろう。若者の抗弁を受けて大人たちがテレビの継続的な使用にそれほど乗り気でないことを察するや否や、村内の幼稚園で働く TAO 職員は、普段からテレビに釘付けになっている子供たちを利用し始めた。手を下ろすよ

う子供たちを促す大人たちに対して「子供の意見も尊重するべきである」と諭し、子供たちを含めた多数決という形でどうにか自分たちの目的を達成しようとしたのである。

役人らの思惑がどうなったかは事例ですで見ただけだが、以上に加えて彼らが開発現場で用いる巧みな手だての一つとして触れておきたいのは、タイ社会で多用される「ピー・ノーン (*phi nong*)」である。一般的に「キョウダイ」と訳されるこの言葉は、血縁者だけでなく非血縁者に対しても広く頻繁に使用され、その効用は、一時的であるにせよ、ある種の情緒的紐帯を生み出し、その場にいる者たちを結びつけることにある。とりわけ山地民開発の文脈においてこの言葉は、温情主義ともいえるイデオロギーを多分に孕んでおり、「持てる兄 (*phi*)」であるタイ人が「持たぬ弟 (*nong*)」である山地民に手を差し伸べるという構図を作り出すことに一役買っている。¹²⁾ 先の事例ではこの言葉が直接出てくることはなかったが、普段は村にくることのない SDC の所長や TAO の首長などが村に来た時にはよく耳にする言葉の一つであり、同じ構図は先の会議においても再現されている。

もっとも、これらの言葉が名ばかりのものであることは役人側もムラブリ側も互いに承知の上である。しかしここで注意しなければならないのは、こうした一見すると温情主義的な言動には、ともすれば役人らの政治的思惑を知らず知らずのうちにうやむやにする可能性があるという点にある。事実、先の事例において「テレビの継続的な使用に対する拒否」という選択肢はムラブリに与えられていたはずであり、実際に一部のムラブリは明確にこれを選択した。しかしムラブリの意思表示がいつの間にか議論の枠外に置かれ、結果としてテレビの継続的使用という役人らの思惑通りになったのは、この可能性が現実のものとなったことを示している。とくにこのことが問題であると思われるのは、どのような開発プログラムがムラブリにとって望ましいのかという本質的な問題（例えば、テレビの提供自体が本当に必要なのかどうかという問題）が置き去りにされたまま議論が進んでしまうことにある。

以上を踏まえると、一体誰のための開発であるのかという素朴な疑問が当然出てくることだろう。この点において開発現場で例外なく目にするのできる写真撮影は、部分的ではあるものの、役人らの態度をよく示している。例えば写真3は、強風でトタン屋根が破壊されるなどの被害が出たファイ・ユアック村に、BPP 隊員らが救援物資を届けに来た時のものである（写真3）。両脇に国王と王妃の写真を立てて背後に横断幕を張り、綺麗に陳列された救援物資の後ろにムラブリを立たせて、正面と端に制服に身を包んだ隊員が立つという構図が、ムラブリに「ノーン」と優しく呼びかけながら彼らに笑顔を強要するジャージ姿の隊員によって写真に収められている。結果的に届けられた救援物資は各世帯に配られたため、ムラブリにとって

12) 実際、チェンマイ山地民博物館に展示されていたパネルには、山地民を「弟」、タイ人を「兄」として兄が弟の生活向上のために善良な思いで支援に尽力してきたという趣旨のフレーズが何度も繰り返して強調されていた [石井 2007: 87-88]。



写真 3 BPP 隊員による写真撮影 (2013 年 5 月 3 日筆者撮影)

も一応の益とはなったが、しかし BPP 隊員らにとっては救援物資の提供よりも報告書作成のための写真撮影の方が重要であり、優先される。

そもそも開発する側は目に見える結果を欲しているために、視覚的に分かりやすい開発プログラムを好む傾向にある [Tawin 1997: 105]。あるムラブリ青年はこうした役人らの行動をタイ語で「体裁を繕う (*kan pluk phakchi roy na*)」と筆者に説明し、ムラブリ語で「役人は俺たちを利用しているのだ (*ʔyh mlaʔpiaʔsleh di buk*)」と彼らを揶揄したが、実際に体を動かすことなく撮影時だけムラブリに混じって作業をする (振りをする) 彼らの行動は、少なくともそれがムラブリのためというよりは、彼ら自身のためであることを観察者に勧導させることだろう。

以上で見てきたように、開発現場にみるタイ人役人らの温情主義的な態度は、開発の実質的な成果よりも、開発に関わるという行為自体に関心を払う彼らの政治的思惑を上手く覆い隠すための隠れ蓑となっている。¹³⁾ そこでは結論ありきで開発プログラムが進められるために、開発される側の意見が反映されることはほとんどない。繰り返しになるが、誰にとつての「開発」であるのかという基本的かつもっとも重要な問題が置き去りにされているわけである。もっとも、このような事態が起きる基本的な背景には、ムラブリに対する蔑視があることは指摘しておくべきだろう。統合政策の目的が山地民を「第一級のタイ市民」とすることであったことや、開発の遅れをムラブリに帰すような発言からも窺い知れるように、開発とはムラブリがまだ見ぬ「未来」であって、来る未来へと導くのは「私たちタイ人である」というのが、役人らに広く認められる基本的な思考である。捉えようによっては山地民開発における「ピー・ノーン」言説と同じ構図がムラブリ開発でも繰り返されているということにもなるが、問題であるのは、これまで見てきた巧みな手立てを通じて、生活の質的向上の促進や自給的な生活の実現という開発本来の目的が置き去りにされ、開発に関わっているという行為自体が自己目的化しているという点であろう。しかしながら一方で、こうした状況が改善されればムラブリ開

13) 藤田はタイの森林保護政策と農民の暮らしを考察するなかで、建前と現実の乖離を完全に解消することなく、むしろ乖離のなかで現実に即した柔軟な裁量的措置をとるやり方を「やわらかい保護」と呼び、これをタイ社会の特質にまで敷衍している [藤田 2008: 77-78]。藤田の議論をそのまま適用することはできないが、少なくとも建前と現実の乖離をそのような概念で埋めることは、本稿の議論においては物事の本質を見誤ることになりかねないことは指摘しておきたい。

開発が進展するかどうかについては慎重にならざるを得ない。開発の遅れを役人らの温情主義的態度や自民族中心主義的態度にのみ帰することはできないからである。私見によれば、近隣に暮らすモンが、開発の前提となるムラブリの経済的自立を大きく阻害している。次節ではこの点に焦点を当ててさらに考察を進めていきたい。

IV-2 モンの政治力と経済的優位性

同じオーストロアジア語族に属するカムヤティン、ルアが比較的早くから平地タイ社会に混入・同化したのとは異なり、部外者との接触を極力避けながら遊動生活を送ってきたムラブリは、相対的に高い社会文化的自律性を保ってきた。しかし1970年代に入ると、他民族への経済的な依存を急速に高めていくこととなる。その主要因は、第二次世界大戦以降に加速した大規模な森林消失 [cf. Delang 2002]、そして1960年代から始まる自然保護政策による森林地帯からの締め出しである [Sakkarin 2007: 108]。自然生産物の減少と狩猟採集活動の困難に伴い、ムラブリは自分たちの労働力を提供することで、それまで物々交換で手に入れてきた食料や生活必需品を得るようになった。その中でもとりわけ密接な経済的関係を取り結んできたのがモンであり [Ikeya and Nakai 2009]、両者の関係はファイ・ユアック村の設置以前から度々指摘されてきた [e. g. Chanan 1992; Trier 2008]。¹⁴⁾ また同様の状況はファイ・ホーム村にも当てはまるが、タ・ワ村ではタイ・ユアンとの経済的関係が目立ち、またプー・ファー開発センターとファイ・ルー村に至っては、他民族との関係はほとんどないものの、その代わりに王室プロジェクトの実質的担い手である森林局との間に緊密な関係が認められる。

ムラブリ開発という視点から注目すべきは、その政治力に裏打ちされた蒙の経済的優位性である。既述した通り、ムラブリの居住地は蒙の居住地であるファイ・ユアック村内に設置されており、ムラブリの居住地は行政村として認められていない。したがってファイ・ユアック村の村長はモンであり、彼を支える2名の村長補佐 (*phu chuai*) もまたモンである。これはつまりファイ・ユアック村の管理・運営に関する直接的な権限は実質的にモンにあることを意味している。2012年からは、ムラブリも村長補佐 (1名) として採用されているが、郡庁で

14) しかしながら、ムラブリがモンを必要としたとする理解は一面的である。つまりモンにもまたムラブリを必要とする事情があった。例えば1958年のケシ栽培禁止令を経て、とくに1970年代を通じてモンを取り巻く社会経済的状況は劇的に変化したが、ムラブリの経済的・社会的変化について論じるチャナンが調査したモンは、共産党勢力の脅威から逃れてタイに移住し、その後も身を迫られる形でナーン県内に移住していたものの、ケシ栽培を禁止する政府の圧力により、トウモロコシを中心とする換金作物栽培を開始したという [Chanan 1992]。しかし市場経済への依存度を増すにつれて生活の維持には膨大な費用がかかり、実に61%の世帯が町の商人から借金をしていた。借金は主に農地の拡張やトラックの購入費などに充てられたというが、当然のことながら、農地拡張にはそれに見合う労働力が必要となる。そこで以前から経済的関係を結んでいたムラブリを新たな労働力として見出したというわけである。

行われる定期集会などに顔を出すことが要求されるものの、ファイ・ユアック村全体の管理・運営に直接関わることはまずない。ムラブリの村長補佐はあくまで県一郡一区一村と下りてくる連絡事項を他のムラブリに伝える連絡係でしかなく、極めて限定的な権限を持っているに過ぎない。¹⁵⁾

こうしたファイ・ユアック村の権力構造の中で際立っているのは、モンの経済的優位性である。タイ北部に暮らす他の山地民と同様、ファイ・ユアック村やその周辺に暮らすモンやミエンは主に換金作物栽培によって生計を立てている。ムラブリも例外ではないが、しかしムラブリの場合、モンやミエンへの労働力の提供による賃金労働なくして日々の生活は成り立たない。その理由として、ムラブリが所有する畑がモンやミエンよりもはるかに小規模であること、そしてそれゆえに収入が極めて少ないことが挙げられる。畑は尾根や谷といった地形的特徴によって区画されていることもあり、所有する畑面積について尋ねても正確な情報を得ることは難しいが、2014 年 2 月に行った収入に関する聞き取り調査では、モンが 1 年間で得る収入は最大で 40 万バーツ (120 万円)、最低でも 6 万バーツ (18 万円) であり、一方のムラブリは最大で 11 万バーツ (33 万円)、最低で 2 万バーツ (6 万円) であった。一見すると最低年収にそれほど大きな差はないように思えるが、ムラブリの場合、換金作物栽培で得られる収益のおよそ半分が借金返済のために消えてしまうことを考えれば、その経済的格差は想像以上に大きい。

言うまでもなく、換金作物栽培には資本が必要となる。種子や肥料、農薬の購入にかかる基本的なコストに加え、収穫袋や耕作機、収穫物を町の市場に運ぶための大型トラックの購入費とその燃料費といった、換金作物栽培ゆえに必要な経費である。これらに加えて栽培期間中の生活費が必要となるが、いずれにせよ土地を所有しているだけでは換金作物栽培は成り立たない。そのため資金の借入が必須となるが、借入先はほとんどがモンであることから、モンは貸出金の利子で収入が増す反面、ムラブリは売上の約半分が借金返済で消えることとなる。確かに、換金作物栽培による収入やモンとミエンへの労働力提供によって得られる賃金を貯蓄し、少しずつ借金地獄から抜け出すという方法も考えられなくもない。しかし賃金労働で得られる賃金は低い水準であるため実質的に不可能である。作業内容によって賃金は変わるが、基本的に 1 日で得られる賃金は 200~250 バーツ (600~750 円) である。¹⁶⁾ 加えて、一般的に公衆衛生や近代医療による出生率の増加と死亡率の低下が見られる定住生活では食い扶持が増えるために家計を圧迫することとなるが、このような状況で換金作物栽培に掛かる必要経費全般を工面することは極めて難しい。

15) なお、SDC にも特別職員としてモンが在職しており、さらにはムラブリのエスニック・ツーリズムではモンが重要なミドルマンとしての役割を担っている [cf. Nimonjiya 2014]。

16) 2013 年 1 月からタイでは日額最低賃金が 300 バーツ (900 円) まで底上げされたものの、少なくともファイ・ユアック村ではそれが達成されていない。

このように、ムラブリを取り巻く今日の状況はモンの経済的優位性によって大きく制限かつ規定されており、ムラブリ開発の最終目標である自活的な生活の確立はほとんど絵に描いた餅となっているのが現状である。その場で自然生産物を獲得し消費するというこれまでの即時的な生活とは大きく異なり、今日の定住生活では資本の貯蓄と投資をベースにした持続的な生活が求められるが、しかし資本がないなかで換金作物栽培を続けるには多額の借金を背負わざるを得ず、また借金を抱えたなかで日々の生活費を賄うことはできないため、結局は賃金労働に従事せざるを得ない。こうした悪循環がムラブリとモンとの経済格差をさらに助長する構造的要因であると同時に、ムラブリ開発にとって大きな障壁となっているのである。

もちろん、このような状況であるからこそ、行政による介入が必要であるように思える。しかしそれが実質的に困難であるのは、ムラブリ開発が目指す安定した生活基盤の確立が、ムラブリを安価で使い勝手の良い労働力として利用し、また当該地域において強い経済的影響力をもつモンの既得権益に対する挑戦となり、結果的にモンからの拒否反応を引き起こすからである。このことは、例えば次に紹介する事例に明確に示されている。

【事例 2】

2012 年 10 月 9 日の晩、ファイ・ユアック村を管轄するウィアンサー郡庁の呼びかけによって、ある会議がモンの村にある集会場で開かれた。郡庁の担当者数名に加え、モンからは約 100 名、ムラブリからは 10 名ほどが参加した会議の議題は、ムラブリの定住村を行政村として独立させるか否かであった。しかし約 1 時間半に及ぶ会議では、郡庁からの提案に対するモンによる反対意見が大半を占めていた。つまりモンは村を分ける必要性はないと主張したのである。とくにその理由としてモンが挙げたのは、ムラブリの人口が村として成立するにはまだ十分ではないこと、ムラブリは村を管理し運営して行く能力及び知識を欠いていることの 2 点であった。モンだけから意見が出てくる状況を見かねたのか、役人の一人がモンを制止し、「トン・ルアン側の意見はどうだ」とムラブリに意見を求めた。これに対してムラブリはなかなか答えなかったが、しばらくして代表者であるタ・シーは「自分たちの村が欲しい」とか細かい声で答えた。するとそれを聞いたモンは憤慨し、ムラブリに対する不平不満が漏れ出した。「そもそもこうした重要な会議にムラブリはほとんど参加しない。彼らは自分たちのことにすら関心がない」「何も言わないということは我々が言っていることに同意しているということじゃないか」という発言を皮切りに、「トン・ルアンは我々モンの要求通りに仕事をしないので、むしろ損をしているのは我々の方だ」や、「トン・ルアンは仕事が遅い」、「トン・ルアンは我々を嫌い、賃金が安いと不平不満を言う」といった、議題とは直接関係のない誹謗中傷が矢継ぎ早に出た。郡庁側は「あくまで意見を聞いているだけだ」とモンを宥めようと必死だったが、結局、これ以上状況を悪化させるのは良くないと判断により、当面は現状を維持し、

また話し合いの機会を設けるという結論で会議は終了した。しかしその後同じ議題で会議が開かれることはなかった。

ファイ・ルー村で王室プロジェクトに関わる森林局の職員は「ファイ・ユアック村のムラブリが抱える最大の問題とは借金だ」と指摘し、またムラブリ開発に長年携わってきた SDC 職員は「モンはファイ・ユアック村周辺で大きな権力 (*amnat yai*) を持っている」と言うが、これらの発言からは役人たちがファイ・ユアック村を取り巻く現状を的確に理解していることが窺える。だがこれらの問題に対する行政の介入を困難なものにしているのは、これまで見てきた、モンの政治力とそれに裏打ちされた経済的優位性である。とくに事例 2 において会議を中断に追いやったのは、ムラブリが政治的自律性をもつことに対するモンの激しい拒絶反応であった。

モンがムラブリの行政上の独立に反対したのは、端的に言って、当該地域におけるモンの絶対的な地位が脅かされるかもしれないという危機感があったからである。もちろん、現状に鑑みれば、ムラブリが政治的自律性を得たからといってモンの抱く危機感が現実のものとなる可能性はまだ低い。それほどまでに彼らの政治力と経済力はムラブリの生活環境の隅々にまで浸透している。しかしそれでもなお事例に見たような反応がモンの側で起きたのは、ムラブリに対する政治的・経済的な影響力が低下するかもしれないという懸念があったからだと思われる。¹⁷⁾ 村長補佐として働くムラブリ男性によれば、ムラブリが行政上の独立を果たせば、行政からの多額の経済的援助を、これまでのようにモンを経由してではなく、ムラブリが直接受けることが可能となるという。この発言を踏まえれば、ムラブリが当該地域において政治力を得ることは、少なくともモンにとって不利となることはあっても、何ら益となるものではないと言える。

もちろん、こうした危機感が露骨に示されることはないために、これは過剰な解釈であると思われるかもしれない。しかしムラブリの政治的自律性という、本来はモンにとって何ら関係のないはずの事柄について彼らが反対を表明するのは、明らかにムラブリの行政上の独立が自分たちにとって何かしらの影響を与えると考えられたからではないだろうか。反対の理由として、ムラブリの住民が少ないことと村を管理・運営する上での能力及び知識を欠いていることがモンによって挙げられたが、よくよく考えればこのこと自体が非常に不自然である。なぜな

17) ムラブリという労働力に対する評価には、モンの間でも意見が分かれることは付言しておきたい。例えばファイ・ユアック村で小さな売店を経営するモンに「ムラブリが移住してしまったら、モンは労働力を失い困るのではないか」と尋ねた際、彼の回答は、「いや、ムラブリがいなくても他の者を雇えばいい。例えばティンとか。賃金はムラブリよりも高くなるだろうが」というものであった。しかしここで彼がムラブリに代わる労働力として挙げるティンはファイ・ユアック村周辺にはいない。一番近いティンの村でも 30 km ほど離れている。つまり彼の案は現実的ではない。

ら以上の理由のいずれもがモンとは全く関係のない事柄だからである。しかしこの不自然さが却って、彼らの反対理由が単にムラブリだけの問題ではないことを匂わせている。つまりムラブリの行政上の独立は条件の問題ではなく、むしろモンにとって不利益をもたらす事柄なのである。このことは、会議にて発言したモンが、例外なくムラブリを頻繁に雇用する者たちだったということからも明らかである。

だが一方で、モンが反対したのは彼らの経済的優位性が瓦解するのではないかという懸念だけであったわけではない。例えば当初は、行政村として独立するにはムラブリはまだ条件を満たしていないとして、モンはあくまでムラブリを間近で見てきた立場から反対の意を示していた。しかしムラブリが「自分たちの村が欲しい」と答えるや否や、ムラブリとの関係で不利益を被っているのはむしろ自分たちの方であると憤慨し、それまでとは全く趣向の異なる批判を展開した。仮にそうであれば、郡庁の提案に乗り、ムラブリの要求を支持するはずである。自分たちが不利益を被っているのであれば、ムラブリが行政的に独立した方が都合は良い。しかしそうはならなかったのは、タ・シーの発言の背後に、自分たちに対するムラブリの不平不満を嗅ぎ取ったからであろう。自分たちこそがムラブリの面倒を見てきたのだと語るモンは意外と多いが、しかし会議が終わり村に戻った際、数人のムラブリは「よそ者の考えは俺たちの気持ちとは違う (*kwɔr di prɔwt, hak mlaʔ di klol*)」と言い、終始沈黙を貫いていた一人は「モンに囲まれて生活するのは嫌だから自分たちだけの村を作りたい」と本音を漏らした。タ・シーの発言は、間接的ながらもこうしたムラブリの思いをモンに示すものであったのである。

この事例に関連して興味深いのは、2007年に始まった王室プロジェクトがファイ・ユアック村からの撤退を余儀なくされたことである。王室プロジェクトの実質的な担い手である森林局は、2010年にファイ・ユアック村から30 kmほど離れた国立公園内にファイ・ルー村という新たな定住村を設置することを決定した。このことについて森林局のある職員は、「ファイ・ユアック村には森がなく、ムラブリの伝統文化を守るためには新しい定住村を作る必要がある」と筆者に語ったが、ファイ・ユアック村からファイ・ルー村に移住したあるムラブリ青年によれば、森林局の開発プログラムは賃金を支払うことでムラブリを積極的に開発事業に参加させようとしたが、ムラブリという労働力が奪われるのではないかと懸念するモンと度々衝突したため、新たに定住村を作ったほうが良いと判断したということであった。

確かにムラブリの政治的自律性は開発とは直接的には関係がない。しかし新しい定住村の設置という森林局の決断が示唆しているように、行政上の独立に基づくモンからの経済的自立は、ムラブリ開発の理念である自活的な生活の確立にとっては不可欠の要件である。しかしモンとムラブリの経済的格差は、モンによって積極的に維持されているのであり、こうした蒙ンの関心はムラブリ開発を大きく阻害する要因の一つであると言える。しかし「終わらない開発」という状況を作り出しているのは、これまで見てきたタイ人役人やモンだけではない。開発の対

象であるはずのムラブリもまた、「終わらない開発」の一因となっている。

IV-3 開発現場にみるムラブリの社会文化的態度

開発が進まない理由について役人らがしばし引き合いに出すのが、ムラブリの「未開性」である。ある BPP 隊員は「ムラブリには秩序 (*rabiap*) がなく、自由 (*isra*) を好む」と筆者に語ったことがあるが、詰まる所、この言葉は「ムラブリに何かさせようとするとは彼らはそれを放棄してその場から立ち去ってしまうため、開発が思うように進まない」ということを意味している。代替生業のために提供された家畜を食べてしまったといった例が、彼らの目にはこのように映るわけである。しかし現象レベルでは確かにそのように「見える」ものの、エミックな視点から言えば妥当な解釈とは言えない。筆者がフィールドで目の当たりにしてきたのはむしろ、ムラブリの社会文化的態度が開発現場においては悉くネガティブなものみなされてしまうという事態であり、さらには彼らの社会文化的態度が開発の遅れを助長し、「終わらない開発」の一因にもなっているということであった。

ここで再度確認しておくべきことは、ムラブリは長らく遊動狩猟採集民として生きてきたという歴史的事実である。物々交換や労働力の提供を通じて他民族と限定的な経済的関係を結んできたものの、基本的には狩猟採集活動で得た森の資源で生計を立ててきた。しかし食料生産経済ではないために、周囲の資源が減少すると必然的にキャンプ地を移動せざるを得ない。もっとも、キャンプ地の移動はこうした生態学的要因にのみ起因するわけではないが、ムラブリの別称である「黄色い葉の精霊／お化け」には彼らの遊動生活の特徴がいみじくも表現されている。「黄色い葉」というのは、簡素な作りの風除けに使用するバナナの葉が黄色く変色する頃にムラブリがキャンプ地を移動していたことに由来し、また「精霊／お化け」には「よそ者」を極端に恐れるムラブリの民族的性向が示唆されている。ムラブリは他民族による殺戮やレイプといった恐れを経験から [e. g. Trier 2008: 50, 53; Chazée 2001: 9], 部外者との接触を極力避けてきた。よそ者の存在を察知するとすぐさま家財道具一切を捨てて森の奥深くへ身を隠していたため、森に入ったよそ者が目にするのは、バナナの葉が掛けられた簡素な風除けと焚き火の跡といった僅かな証拠だけで、それが人間の残した痕跡であるのか不確かだったために、人びとはムラブリを「精霊／お化け」と呼んだのである。

ここで興味深いのは、定住化が進む今日でもよそ者に対する態度がさほど変わってないように思えることである。例えば調査中、夜中に酔って大声をあげた者に対する忠告や、我を忘れて大はしゃぎする子供に対する「しつけ」には、決まって「よそ者」が登場する（脚注 11 を参照）。「よそ者が起きてくる（から止めなさい）よ！」や、「よそ者が（怒りに）来るわよ！」といった具合である。もっとも、今日でいうところの「よそ者」は冗談交じりの慣用表現であるため、従来ほどの深刻さはないように思えるが、それが忠告やしつけの際に用いられること

からも、「よそ者」という言葉には現在でも強い警戒心や恐怖心が含まれている。

以上を踏まえた上で注目したいのは、よそ者に相対した際のムラブリの反応と態度である。遊動生活の頃とは異なり、今日の定住生活においてよそ者との接触を回避するのは物理的に困難であり、非現実的であることは言うまでもない。タイ人役人やモンによる政治的・経済的な囲い込みがなされている今日の状況では尚更のことであるが、そのような状況下であって、彼らはどのような態度を取るのだろうか。以下では既に紹介した二つの事例を再度取り上げることで、この問題について考えてみたい。

先に挙げた事例に見た二つの会議は異なる時間と場所で開かれたものだが、ムラブリの態度に目を向けると、そこには極めて多くの共通点が認められる。とくに際立っているのは、ムラブリの消極的ないし受動的な態度である。例えば事例1（以下、会議A）ではテレビの前に座っていた子供とは対照的に、大人たちは集会場を囲むように集まり、決して集会場のなかに自ら入ろうとはしなかった（写真4）。また事例2（以下、会議B）では、集会場に並べられた椅子のなかでも後ろの方に座ったり、集会場の壁伝いに座ったりと、前や中央に陣取るモンとは対照的に、できるだけ目立たないところにムラブリたちは陣取っていた。加えて会議Aで唯一反論した若者が実はすでに酒を飲んでいて気が大きくなっていたこと、また会議Bに見たタ・シーの発言はその場を取り仕切る郡庁職員からの要求が発端であったことから、やや間接的ではあるが、ムラブリの多くは会議に積極的に参加しようとはしていなかったことが窺える。¹⁸⁾ こうした消極的とも受動的とも言える彼らの態度が、既に触れたよそ者に対する恐怖心に拠るものであると考えることはあながち的外れではない。「よそ者が怖い」（*krɔw kwɔɔr*）



写真4 会議Aの様子（2013年12月13日筆者撮影）

とはムラブリが普段からよく口にする言葉だが、よそ者に対する恐怖心は彼らに発言を躊躇させ、萎縮させることになる。これに加えて、いずれの会議でも、実際に会議に参加することのなかった人びとがいたことは注目するに値する。事実、会議Aでは村にいた全員が役人らの呼びかけに応じて参加したわけではな

18) タイ人役人らもこのようなムラブリの消極的な態度を熟知しているように思われる。そのように考えることができるのは、例えばTAO職員が予めテレビをつけておき、会議を始める際にテレビを消すという一連の動作に求めることができる。つまりテレビを付けて子供や大人を集め、一定数が集まるとテレビを消して集会を始めていたが、こうした手段を取らなければムラブリを一カ所に集めることができないわけである。

かった。とくに会議 B において、集会場にはモンが 100 名ほどいたのに対して、ムラブリは僅か 10 名程度であった。つまりほとんどの者は会議にすら参加しなかったのである。

だがここでより重要であるのは、事例にみたムラブリの態度の背後によ者に対する恐怖心があったことではない。問題は、彼らの消極的とも受動的とも取れる態度が、タイ人役人やモンといったよ者に誤解を生ませてしまうということにある。「そもそもこうした重要な会議にムラブリはほとんど参加しない。彼らは自分たちのことにすら関心がない」や「何も言わないということは我々が言っていることに同意しているということじゃないか」といった事例 2 での蒙の発言に端的に示されているように、不参加や無言といった態度は無関心や暗黙の同意として見なされてしまい、場合によってはそうした態度がよ者（この場合はモン）にとって有利に働いてしまう。また、「テレビはいらない」とする会議 A でみた若者の発言に役人らは驚いた様子を見せていたが、それは反論など出ないことがあらかじめ想定されていたからであり、若者の発言が彼らにとって想定外のものだったからに他ならない。しかし一方で、ムラブリの消極的ないし受動的な態度をよ者に対する警戒心や恐怖心に対する反応としてのみ理解してしまうべきではない。なぜならそのような態度を取ることは、ムラブリにとって「自由」であるための社会文化的態度でもあるからである。

具体的にみていこう。モンとの関係について、タ・シーに聞き取り調査をしていた時である。会議 B を引き合いに出しながら、「自分たちの考えがあるのに、なぜムラブリはそれを主張しないのか」と尋ねた際、彼は次のように述べた。「よ者（モン）は恐ろしい。何かあるとすぐに怒り出す。だが言い争ってはいけない。私たちは言い争わない。何か（良くないことが）あっても『気にするな』（*yum dok*）と言うんだ。私たちは何かを強要（*bangkhap*）されることが嫌いだ。私たちは自由（*isra*）であることを好む」。ここではモンとムラブリとが対照的に語られながら、物事一般に対するムラブリの基本的な理念が示されているという点で非常に興味深い。本節での議論に引き寄せて以上の言葉を素直に受け止めれば、ムラブリの基本的理念とは次のようになる。すなわち、「ムラブリは言い争いを好まず、意見を強要されることも好まない。『自由』とは強要されないことである」。

言い争わないための手っ取り早い方策は、争いの原因となりうる発言自体を「控える」ことである。話し合いとはそもそも意見の相違を前提とするが、だからこそ意見の擦り合わせの過程で何らかの衝突は免れ得ない。しかしそのような衝突は発言を控えることで容易に回避できる。「よ者の考えは俺たちの気持ちとは違う」とはムラブリにも考えや思いがあるということの証左であるが、しかしそれが争いを生んでしまうのであれば、ムラブリは自分の意見を括弧に入れるわけである。

このような態度を、ムラブリが遊動狩猟採集民であったという事実を求めることは決して難しいことではない。他の遊動狩猟採集民と同様、ムラブリは森での遊動生活において「バン

ド」という流動性の高い小規模な社会集団を構成してきた。対面的な社会関係において、成員間の軋轢や争いは避けることのできない事柄だが、集団的な意思決定権をもつリーダー的存在が不在であるバンドにおいて、そうした軋轢や争いの解決は、話し合いではなく、その場を立ち去ることによって図られる。つまり当事者が、一時的であれ、他のバンドに移り住むことで不和の解消が図られるのであり、「狩猟・採集集団の移動生活はそれ自体が、発生するすべての紛争を処理する手段を内包しているのである」[ロバーツ 1982: 111]。ここで注目すべきであるのは、こうした手段が「他者を排除する」ではなく、「自ら身を引く」という身構えを前提にしているということである。もっとも、身を引くか引かないか、いつ身を引くかといった問題は極めて個人的なものであるため議論に限界はあるが、少なくともそのような身構えが社会的に肯定され、「身を引く」という選択肢が常に個々人に与えられているという状態こそがここでは重要となる。

しかしながらムラブリの不参加や無言といった態度、さらにはその前提となる「身を引く」という身構えが開発という点からみて問題であると思われるのは、それらがあくまで争い事の回避を志向するものであり、物事の根本的な解決をそもそも志向するものではないということである。この問題は、ムラブリは「開発」についてどのように考えているかという基本的な問題にも通ずるものであるが、結論を先取りして言えば、ムラブリにとって「開発」による益を得られるようなら得ようとするものの、それは二の次であるということだと言える。このように考えることができるのは、例えば「テレビはいらない」という会議 A にみた若者の発言、より厳密に言えばその理由にある。反論すること自体が避けられるべきであったなかで（実際に若者以外は無言を貫いていた）、若者の発言はある意味で（子供たちを除く）ムラブリ全体の意見を代弁していた。「テレビはもういらない」という意見の根拠として彼は、タ・シーの家にもテレビがあるため集会場にテレビを置く必要性はないこと、そしてムラブリの管理不足を理由に役人らが怒るのであれば、怒りの原因であるテレビ自体をなくしたほうが良いことを挙げたが、ここで大変に興味深いのは後者である。なぜならテレビを不要とする理由が、「よそ者に怒られるなら」ではなく、「よそ者が怒るなら」であるという、一聞ただけではやや理解に苦しむ論理に支えられているからである。しかし彼らの関心が自分たちではなく、他者を含む社会環境にあると考えればこの論理は明快に理解できるだろう。つまり役人らに叱責されるということよりも、彼らの怒りが原因で事が荒立っているということが問題視されているのであって、そうであれば怒りの原因であるテレビ自体を不要とした方が良いというわけである。このことはまた、それがムラブリ語で共有されたことから明白であろう。この論理がムラブリの間では難なく聞き入れられる類のものである一方で、しかしそれは役人らとは共有できないものと初めから想定されているのである。

こうした論理に立脚したムラブリの社会文化的な態度は尊重されてしかるべきである。しか

しそうは言いつつも、それが開発の遅れを助長する一因であることは改めて確認しておくべきだろう。確かにムラブリの消極的ないし受動的な態度はよそ者への警戒心や恐怖心の表れとしてのみならず、争いの回避手段という社会文化的価値をもつものだが、「交渉」を通じて妥協点を見出しながら自分たちの利益を確保しようと努めることを正当法とする「よそ者」の目には、それが無関心や無言の同意として映ってしまう。その結果、ムラブリにとって不利な状況が生まれるだけでなく、現状を改善する手段であるはずの開発の利点を自分たちの益となるよう活かす機会を（結果として）逃しているのである。

V お わ り に

2 年間にわたるフィールドワークは奇しくも開発現場の参与観察とも言えるものであったが、まるで何かに取り憑かれたように「開発」を口にするタイ人役人らの姿は、なんとも不気味なものであった。それが一体何を意味しているのか、終始理解に苦しんだからである。そもそも「開発」と訳されるタイ語の「パッタナー」は極めて文脈依存的な概念であり、実際にタイ社会において「パッタナーとは何か」に対する一般的な回答は、「道路ができること」や「学校がきれいになること」といったものである [末廣 1993: 14]。¹⁹⁾ 事実、ファイ・ユアック村で筆者が見てきた「パッタナー」は、村の掃除といったやや稚拙にも見えるものから社会インフラの整備といったものまで多岐にわたる。そこでは「現状を良くする何か」という善のイメージが漠然と共有されているに過ぎず、「パッタナー」の先に何があるのかについて具体的に語られることはない。事実、彼らはムラブリの生活環境を改善するためには開発が必要だと口を揃えて言うが、どのような開発がどのような意味でムラブリにとって必要であるのかという本質的な問題が置き去りにされているために、依然として十分な成果を得ることができていない。しかしながら、それが「開発」という名で語られるべきかどうかはともかく、現状に鑑みれば、行政の介入がムラブリの生活環境を改善するために必要な手段の一つであることもまた確かだろう。ムラブリが今日抱える問題の多くは近隣に住むモンとの政治的・経済的な関係に拠るところが大きいことを踏まえれば、ムラブリ自身の努力だけで現在の生活環境を改善するには限界があるからである。あえて筆者個人の見解を述べれば、換金作物栽培に必要な土地を提供し費用を貸し付けることで経済的な自立を促していくことがまずは重要であると考えているが、しか

19) タイ英辞書を引くと、パッタナーは“to develop”だけでなく、“to improve”とも出てくる。また池本によれば、パッタナーという動詞形が辞書に登場するのは 1960 年代の「開発の時代」以降であり、それ以前は *wattana* や *wiwattana* が用いられていた。これらはいずれも名詞形であり、パッタナーのように「～を開発する」といった能動的な要素は欠いたものであった [池本 1997; cf. Demaine 1986]。

し多くの若者がフアイ・ルー村へ移住している背景にフアイ・ユアック村では自活的な生活が困難であるという認識があることを考えれば、先行きは思わしくないとわざるを得ない。しかしそれでも人びとの現在と未来を考えるためにはムラブリ開発の歴史的背景を踏まえて現状を分析する作業が必要不可欠である。

ムラブリ開発を論じるためには、タイ山地民をめぐるこれまでの議論とは異なる前提が必要となる。なぜなら山地民開発とは山地民問題を解決するための政治的手段であったのに対し、ムラブリ開発とは内戦終結後に始まった内政への取り組みの一環だったからである。したがって同じタイ山地民でありながらも政府にとって何ら脅威ではなかったムラブリを対象とした開発は、他の山地民の場合とはその出発点において意味合いが異なっている。このことは政府の開発意欲にも少なからず影響を与えているように思われるが、ここで興味深いのは、山地民開発で高らかに謳われた「開発」と「福祉」が山地民への政治的介入を覆い隠す方便であったのに対して、ムラブリ開発においてはその本来の意味に近い形で用いられてきたことだろう。他の山地民が危険視されてきたのに対して、ムラブリには「憐れみ」の眼差しが向けられてきた。このことはムラブリ開発が社会進化論的観点に基づいて開始され、また開発が進まない要因をムラブリの「未開性」に求める語り口からも容易に想像しうる。すなわちムラブリが森で狩猟採集活動をベースに遊動生活を送ってきたのは彼らが「未開」だからであり、彼らを開発するのは政府として当然の責務であるという視点がこれまでのムラブリ開発を定義してきた。しかし他の山地民に比してムラブリ開発がひどく遅れているのは、確かにタイ山地民としてのムラブリの歴史的特殊性に一部起因するものではあるものの、ムラブリの「未開性」に拠るものでは決してない。そこには開発を主導するタイ人役人の政治的思惑、近隣に住む農耕民モンの経済的優位性、そして開発の対象であるムラブリの社会文化的態度が、同じ空間と時間を共有しながらも、決して相容れることのない跛行的状況がある。つまりタイ人役人にとって開発とは自らの存在意義を正当化する手段であり、モンにとってムラブリが開発され「すぎる」ことは当該地域における自らの絶対的地位を脅かすことであり、またムラブリにとって開発とはよそ者との間に不協和音を生んでしまう契機となる。したがって生活の質的向上とその先にある自立的な生活の確立というムラブリ開発の理念は、それぞれに異なる価値観や利害関係によってその実現が困難な状況にあるのであり、本稿はこうした状況を「終わらない開発」と呼ぶことで、ムラブリを取り巻く今日の状況を可視化しようとした。

もっとも、「パッタナー」が「現状を良くする何か」として語られ続ける限り、そこに具体的な終着点はない。その意味で本稿の題目に掲げた「終わらない開発」は矛盾した表現と言えるだろう。しかしそれでもなおこのような言い回しを用いたのには、「パッタナー」という聞こえの良い言葉によって、ムラブリにとって必要な開発とは何かという本質的な問題が蔑ろにされるだけでなく、ムラブリが今日抱える問題の多くが隠蔽されてしまうことに対する筆者自

身の怒りにも似た危機感があったからである。

「パッターナー」というのであれば、当然のことながら「何をもってパッターナーされた状態と言えるのか」という疑問に答えなければならないが、開発を主導する役人らがこれに答えることはない。恐らく彼らもまた「パッターナー」の先に何があるのかについて明確な回答を持ち合わせていないのだと思われるが、問題であるのは、語らぬことの無責任さに対して、ムラブリが抱える問題があまりにも深刻であるということである。確かに、麻薬中毒や売春問題といった、他の山地民が今日抱える問題の多くをムラブリは共有していない。皮肉にもこれは遅れた開発に拠るところが大きい。しかし急激な社会変化を経験するなかで、観光客から差し出されるお菓子を何の躊躇もなく受け取る子供や、借金による精神的苦痛から農薬を飲んで自殺を図る大人、そして空腹を満たすために観光客の前でふんどし姿になる老人などの姿に透けて見える深刻な社会問題を、「パッターナー」は容易に看過する。

だが現状を憂いているだけでは何も変わらないという認識は、ムラブリの多くが共有しているのも事実である。とくに学校教育などを通じてタイ社会に馴致してきた若い世代のなかには、タイ人役人らが計画する開発プログラムの問題を指摘し、モンによる借金地獄から抜け出す必要性を説き、自分たちの社会文化的態度が自らを不利な立場に追いやっている原因の一つであることを自覚している者もいる。ムラブリはどのような未来を目指していくのか。とくに若い世代の動向を注視しながら、当該地域の動向を丹念に追っていくことが今後の課題になる。

追 記

本稿は、2014 年 4 月にシドニー大学で行われた 12th International Conference on Thai Studies での口頭発表（題目“Are They Obedient People? Development, the Officer, and the Mlabri in Northern Thailand”）、そして 2014 年 7 月に京都大学で行われた日本タイ学会での口頭発表（題目「終らない開発——タイ北部・ムラブリとパッターナー」）を大幅に加筆修正したものである。

参 考 文 献

- Bunyuen Suksaneh. 1997. Phao Thong Lueang: Adit Patchuban lae Anakhot. In *Suepsan Adit an Rueangrung Khong Mueang Nan: Khomun lae Mummong Mai thang Borankhadi Prawatthisat lae Chatphan*, edited by Mahawittayalai Phayap, pp. 93-95. Chiang Mai: Mahawittayalai Phayap.
- Chanan Vongvipak. 1992. Economic and Social Change among the Mlabri. In *The Phi Tong Luang (Mlabri): A Hunter-Gatherer Group in Thailand*, edited by Surin Pookajorn and Staff, pp. 92-103. Bangkok: Odeon Store Printing House.
- Chapman, E. C. 1978. Shifting Cultivation and Economic Development in the Lowlands of Northern Thailand. In *Famers in the Forest: Economic Development and Marginal Agriculture in Northern Thailand*, edited by Peter Kunstadter, E. C. Chapman, and Sanga Sabhasri, pp. 222-235. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Chazée, Laurent. 2001. *The Mrabri in Laos: A World under the Canopy*. Bangkok: White Lotus Press.

- Chupinit Kesmanee. 1994. Dubious Development Concepts in the Thai Highlands: The Chao Khao in Transition. *Law & Society Review* 28(3): 673-686.
- Delang, Claudio O. 2002. Deforestation in Northern Thailand: The Result of Hmong Faming Practices or Thai Development Strategies? *Society and Natural Resources* 15: 483-501.
- Demaine, Harvey. 1986. Kānpattana: Thai Views of Development. In *Context, Meaning and Power in Southeast Asia*, edited by Mark Hobart and Robert H. Taylor, pp. 93-114. Ithaca: Cornell University Southeast Asia Program, Studies on Southeast Asia.
- 藤田 渡. 2008. 『森を使い、森を守る —— タイの森林保護政策と人々の暮らし』 京都：京都大学学術出版会.
- 池本幸夫. 1997. 「開発の概念の諸相 —— タイ」『いま、なぜ「開発と文化」なのか』（岩波講座 開発と文化1）川田順造（編）、252-253 ページ所収。東京：岩波書店.
- Ikeya, Kazunobu; and Nakai, Shinsuke. 2009. Historical and Contemporary Relations between Mlabri and Hmong in Northern Thailand. *Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers: From Prehistory to Present* (Senri Ethnological Studies 73), edited by Kazunobu Ikeya, Hideo Ogawa, and Peter Mitchell, pp. 247-261. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 石井香世子. 2000. 「タイにおける『山地民』概念の変遷」『法学政治学論及』46: 631-635.
- . 2007. 『異文化接触から見る市民意識とエスニシティの動態』 東京：慶応義塾大学出版会.
- Judd, Laurence Cecil. 1977. *Chao Rai Thai: Dry Rice Farmers in Northern Thailand; A Study of Ten Hamlets Practicing Swidden Agriculture and a Restudy Twenty Years Later*. Bangkok: Suriyaban Publishers.
- 片岡 樹. 2013. 「先住民が不法入国労働者か？ —— タイ山地民をめぐる議論が映し出す新たなタイ社会像」『東南アジア研究』50(2): 239-272.
- Khachatphai Burutsaphat. 1983. *Chonklumnoi nai Thai kap Khwammankhong khong Chat*. Bangkok: Samnakphim Phraepitthaya.
- . 1996. *Chao Khao*. Bangkok: Samnakphim Phraepitthaya.
- Kunstadter, Peter; and Chapman, E. C. 1978. Problems of Shifting Cultivation and Economic Development in Northern Thailand. In *Farmers in the Forest: Economic Development and Marginal Agriculture in Northern Thailand*, edited by Peter Kunstadter, E. C. Chapman, and Sanga Sabhasri, pp. 3-23. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Kwanchewan Buadaeng. 2006. The Rise and Fall of the Tribal Research Institute (TRI): "Hill Tribe" Policy and Studies. *Southeast Asian Studies* 44(3): 359-384.
- McCoy, Alfred William. 1972. *The Politics of Heroin in Southeast Asia*. New York: Harper and Row.
- McKinnon, John. 1989. Structural Assimilation and the Consensus: Clearing Grounds on Which to Rearrange Our Thoughts. In *Hill Tribes Today: Problems in Change*, edited by John MacKinnon and Bernard Vienne, pp. 303-359. Bangkok: White Lotus.
- McKinnon, Katharine. 2011. *Development Professionals in Northern Thailand: Hope, Politics and Practice*. Singapore: NUS Press.
- Nimonjiya, Shu. 2013. From 'Ghosts', to 'Hill Tribe', to Thai Citizens: Towards a New History of the Mlabri in Northern Thailand. *Aséanie* 32: 155-176.
- . 2014. Edible Culture and Inedible Culture: Ethnic Tourism of the Mlabri in Northern Thailand. In *Rethinking Asian Tourism: Culture, Encounters and Local Response*, edited by Ploysri Porananond and Victor Terry King, pp. 95-118. Cambridge: Cambridge Scholars Publishing.
- パーasuk・ポンパイチット；ペーカー，クリス. 2006. 『タイ国 —— 近現代の経済と政治』 北原淳；野崎明（監訳）. 東京：刀水書房. （原著 Pasuk Phongpaichit; and Baker, Chris. 2002. *Thailand: Economy and Politics*. 2nd ed. Kuala Lumpur: Oxford University Press.）
- Prasit Leepreecha. 1997. Jungle Tours: A Government Policy in Need of Review. In *Development or Domestication? Indigenous Peoples of Southeast Asia*, edited by Don McCaskill and Ken Kampe, pp. 268-288. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Renard, Ronald D. 1997. The Making of a Problem: Narcotics in Mainland Southeast Asia. In *Development or Domestication? Indigenous Peoples of Southeast Asia*, edited by Don McCaskill and Ken Kampe, pp.

- 307-328. Chiang Mai: Silkworm Books.
- ロバーツ, サイモン. 1982. 『秩序と紛争——人類学的考察』千葉正士 (監訳). 東京: 西田書店. (原著 Roberts, Simon. 1979. *Order and Dispute: An Introduction to Legal Anthropology*. Harmondsworth: Penguin Books.)
- Sakkarin Na Nan. 2007. Resources, Power and Identities of a Hunting-Gathering Society: Revising the Mlabri Ethnic Group in Northern Thailand. *Aséanie* 20: 103-122.
- . 2013. The Incomplete Sedentarization of Nomadic Populations: The Case of the Mlabri. In *Mobility and Heritage in Northern Thailand and Laos: Past and Present*, edited by Olivier Évrard, Dominique Guillaud, and Chayan Vaddhanaphuti, pp. 203-223. Chiang Mai: IRD/CESD/ANR.
- Suchat Buramamitara. 2003. Kaangtanthinthaan 'Khon Tong Luang' (Mlabri) Sueksa Chapo Karani Ban Huai Yuak mu hok Tambon Mekhaning Amphao Wiang Sa Chanwat Nan. MA thesis, Mahawittayalai Naresuan Wittayakhetsansonthet Phayao, Phayao.
- 末廣 昭. 1993. 『タイ——開発と民主主義』東京: 岩波書店.
- Surin Pookajorn; and Staff. 1992. *The Phi Tong Lueng (Mlabri): A Hunter-Gatherer Group in Thailand*. Bangkok: Odeon Store Printing House.
- Tapp, Nicholas. 1989. *Sovereignty and Rebellion: The White Hmong of Northern Thailand*. Singapore: Oxford University Press.
- Tawin Chotichaipiboon. 1997. Socio-Cultural and Environmental Impact of Economic Development on Hill Tribes. In *Development or Domestication? Indigenous Peoples of Southeast Asia*, edited by McCaskill Don and Ken Kampe, pp. 97-116. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Thailand, Kong Songkhro Chao Khao. 2002. *Sisip pi kong Songkhro Chao Khao*. Bangkok: Kong Songkhro Chao Khao.
- Thailand, Krom Prachasongkhro. 1966. *Rai-ngan Kansamruat thang Setthakit lae Sangkhom khong Chao Khao nai Phaknuea khong Prathet Thai*. Bangkok: Ministry of Interior, Department of Public Welfare.
- Trier, Jasper. 2008. *Invoking the Spirits: Fieldwork on the Material and Spiritual Life of the Hunter-Gatherers Mlabri in Northern Thailand*. Aarhus: Aarhus University Press.
- Wanat Bhruksasri. 1989. Government Policy: Highland Ethnic Groups. In *Hill Tribes Today: Problems in Change*, edited by John MacKinnon and Bernard Vienne, pp. 5-31. Bangkok: White Lotus.

新聞

- Bangkok Post*. 1990. Among the Yellow Leaves. April 19, 1990.
- . 1998. Tong Lueng: Victims of Civilisation. September 28, 1998.
- . 1999. Tribespeople Rally against Govt. May 16, 1999.
- Thai Rat*. 2001. Muea "Tong Lueang—2001" thing Chiwit Reron ma Pluk Khao Rai. August 27, 2001.

(2016 年 10 月 25 日 掲載決定)